

コレクション紹介 (I)

概要

平成元(1989)年5月、安田輝子氏(野村氏御令嬢)より「県民の音楽文化の向上に役立ててほしい」との申し出とともに、野村氏が収集された貴重な音楽関係資料をご寄贈いただきました。県立音楽堂では「野村光一先生追悼演奏会」が開催され、「寄贈資料展」も開催しました。

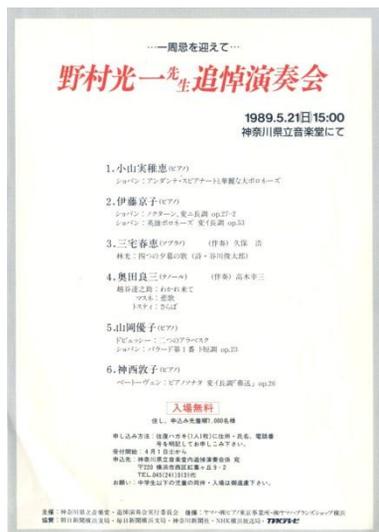
コレクション概要

図書資料 1,526冊(和書772冊、洋書754冊)

LPLレコード 926点

音楽会プログラム 約1,400点

ほか、音楽コンクール関係資料、放送台本、雑誌等



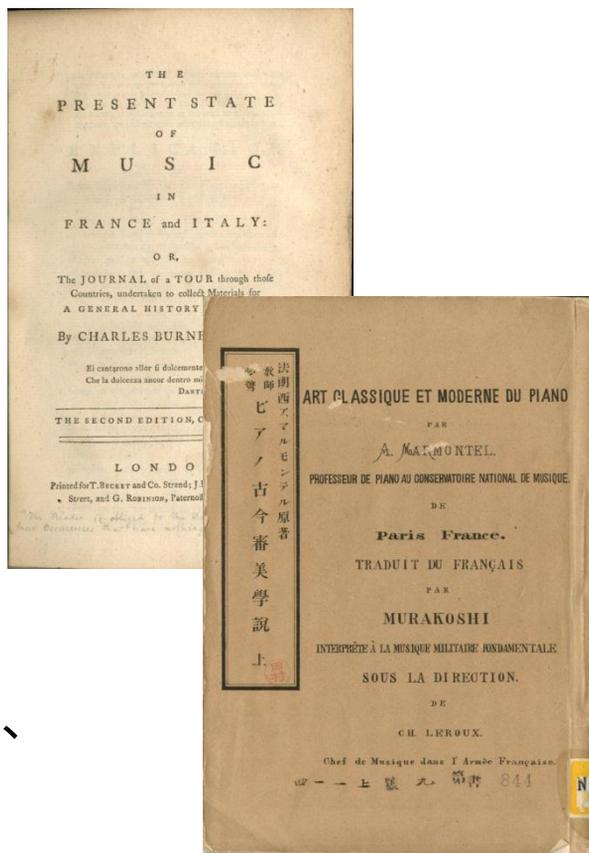
右より
「野村光一先生追悼演奏会」チラシ
「故野村光一氏寄贈資料展 展示目録」

コレクション紹介 (2)

図書

図書資料のうち半分を占める洋書には、英語のほかフランス語、ポーランド語の資料もあります。作曲家の伝記や音楽史に関する資料が多く、特にベートーヴェンとショパンに関する洋書がそれぞれ60冊ほどあります。留学時代に入手したもの、18世紀に刊行された図書もあります。

和書は、1930～60年代に出版された資料が中心となっていますが、明治期のピアノ教育書や日本の音楽史研究などの珍しい資料もあります。洋書と同様ベートーヴェン、ピアノ音楽に関する資料のほか、オペラ、邦楽に関するものも多くあります。



上:『The present state of music in France and Italy』
T. Becket and Co. Strand. 1773(NO-678)

下:『教師必携ピアノ古今審美学説』
出版社不明(陸軍戸山学校印刷) 1888(NO-844)

コレクション紹介 (3)

LPLレコード

レコードのコレクションでは、ピアノ曲が半数以上を占めており、作曲家別では、ショパンの作品を収録した資料がもっとも多くなっています。

【ショパンLPの演奏者別コレクション数】

演奏者名	点数
安川加寿子	15
コルトー	11
ホロヴィッツ	10
チェルニー=ステファンスカ	8
シュトンプカ	7
アルゲリッチ	6
フランソワ	6
ルービンシュタイン	5

最も多い安川加寿子氏は、幼い頃からフランスで教育を受けて活躍していたが、戦争によりやむなく日本に戻って活動した。フランス近代音楽を日本へ紹介し、東京音楽学校教授として門下から多数の優秀なピアニストを輩出している。野村氏とは帰国後すぐより交流があり、野村氏の後に日本ショパン協会会長を務めている。

野村氏の著書には多くのレコード評論がありますが、その中でショパン作品についてはアルフレッド・コルトー(1877-1962)を高く評価し、ショパンの大家として知られるアルトゥール・ルービンシュタイン(1887-1982)については、あまり評価していません。それがコレクション数にも表れています。

一方、野村氏はレコードよりも生の演奏を好み、「家を建てる時にレコードを叩き壊して家の土台にした」という逸話を自ら語っています。

コレクション紹介 (4)

音楽会プログラム



「ボストン交響楽団プログラム」

海外のプログラム(約400点)は、留学中の1921~23年のイギリス、フランスのものが多くなっています。また、ボストン交響楽団プログラム

(1920-27)、フィラデルフィア管弦楽団プログラム(1925-27)などのまとまった資料もあります。

国内の音楽会プログラム(約1000点)は、1920年代から1980年代までありますが、もっとも多いのは1950年代から1960年代の資料です。



「シューマンハインク女史演奏大音楽會曲目解説」
(大正10(1921)年5月16日)

まとまった資料としては、東京音楽学校演奏会(1924-1938:19点)、都民劇場音楽サークル(1953-1981:47点)、毎日ソリスト(1963-1979:31点)などがあり、野村氏が解説や演奏者紹介を執筆しているものも多く含まれます。

コレクション紹介 (5)

国際コンクール関係資料

野村氏は1970年代に世界4大コンクールのうち3つを見学しており、そのプログラム等関連資料がコレクションにあります。

■ ショパン国際ピアノコンクール

野村氏は1970年に開催された第8回コンクールを見学し、国中にあふれる熱気に感銘を受けます。このとき日本人は内田光子氏が2位、遠藤郁子氏が8位に入賞しました。

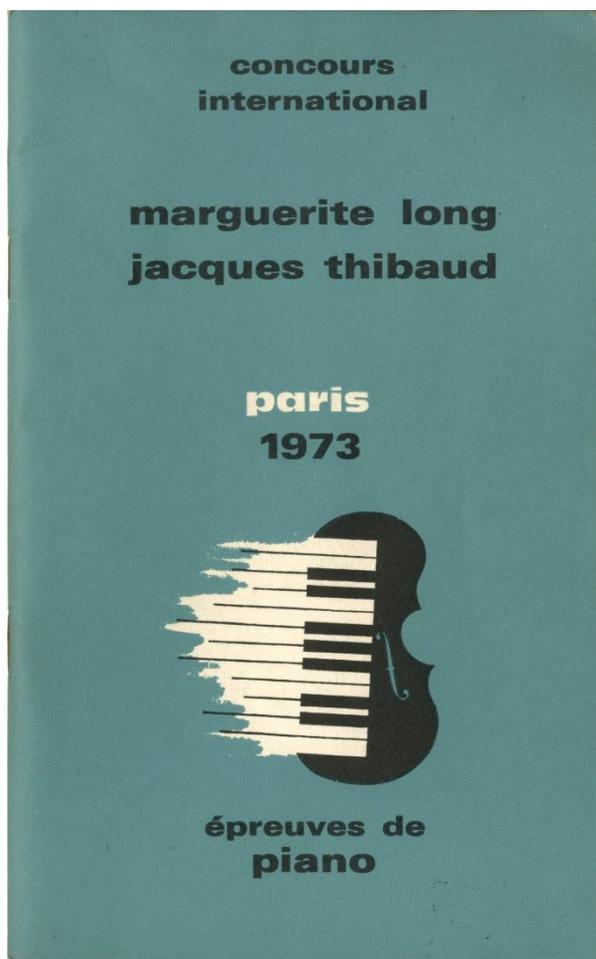
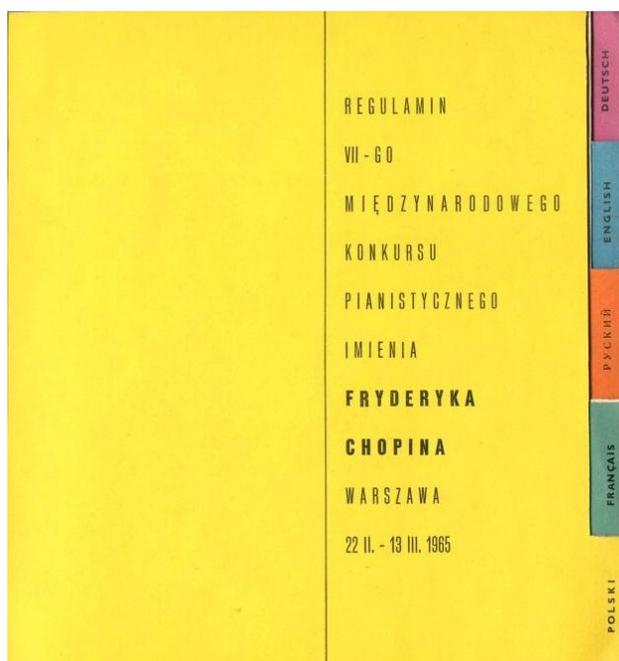
■ エリザベート王妃国際音楽コンクール

野村氏は1972年のピアノ部門を見学しました。最終審査のプログラムには、1位になったフレリー・アフアナシエフのページに野村氏の書き込みが多数見られます。

■ ロン＝ティボー国際音楽コンクール

ピアニスト、マルグリット・ロンとヴァイオリニスト、ジャック・ティボーが創設。野村氏は1973年のピアノ部門を見学しました。著書『ピアノ回想記』には、参加者50人中10人が日本人であることへの驚きが述べられています。

コレクションより



左上:第7回ショパン国際ピアノ・コンクールの参加のための規則書。ポーランド語、フランス語、ロシア語、英語、ドイツ語の5か国語で書かれている。野村氏は著書によると1970年に開催された第8回を見学している。

右上:1972年に開催されたエリザベート王妃国際音楽コンクール・ピアノ部門のプログラム。最終審査のプログラムには、1位になったワレリー・アフナシエフのページなどに野村氏の多数の書き込みがみられる。

左下:ロン・ティボー国際音楽コンクールのプログラム。この年の日本人出場者には、田近完氏、花房晴美氏らの名前が見られる。

コレクション紹介 (6)

国内コンクール関係資料

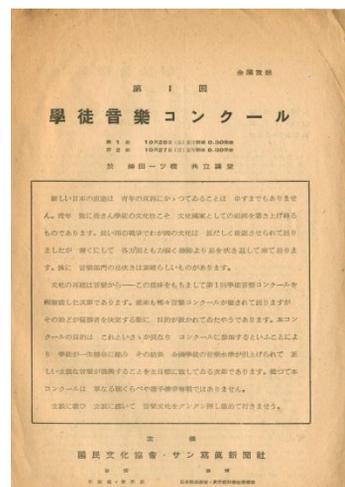
■音楽コンクール(現:日本音楽コンクール)

野村氏が深く関わり多大な貢献をなしたコンクール。コレクションには、第8回(1939)から第43回(1974)の関係資料が残されています。第8回のプログラムには、当時12歳で1位に入賞したヴァイオリニスト江藤俊哉氏の写真が見られます。

■全日本学生音楽コンクール

昭和21(1946)年に国民文化協会、サン写真新聞社共催で行われた「学徒音楽コンクール」を翌年毎日新聞社が継承し、以来最大規模の学生コンクールとして継続しています。

コレクションには、その「第1回学徒音楽コンクール」のプログラムがあり、審査員に野村氏の名前があります。



第1回学徒音楽コンクール
(昭和21(1946)年26、27日)